

『モル・フランダーズ』における近代小説

宮崎 孝一

ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) の数編の物語は、政党の走狗、スパイ、ジャーナリスト等としての

彼の匆忙の生活の片手間に書かれた速成の作品であり、真剣に扱うに足りないものだという評価が、従来専門家の間では多かった。例えば、十八世紀英文学に関する権威レスリー・ステイヴン (Leslie Stephen, 1832-1904) は、その『書斎で過ごす折々』(Hours in a Library, 1st series, 1874) に収められているデフォー論で次のような意見を述べている。

感情や情熱や性格を扱った小説は到底デフォーの考え及ばないところであろう。彼は数限りなく事実や細

部を積み重ねるが、それらは説明者を要せず、事実自体で自明なものばかりである。

それ故、我々は、デフォーの諸作品が、無限の豊かさ、細部の生気を備えているものの、凡百の刑事報告以上の興味を喚起し得るとは考えられない。

*

約言すれば、デフォーの物語の長所は、事実の率直な叙述に本来備わっている長所の域を出ないものである。非常に驚くべきものとか、独自のものとかが全くないので、彼の語り方は物語をごく平凡な水準以上に引き上げることができない。

*

デフォーは、後世の作家には当然のものとなった小説の諸要素に無縁であった。彼は感情や心理には興味がなかった。それらの要素はリチャードソンとフィードリングによって初めて導入されることになるのであって、デフォーは、ひたすら事実を語り、どう感じるかは読者に任せたのであった。

わが夏目漱石（一八六七—一九一六）は、十八世紀英文学に関する考え方においてステイヴンの影響を強く受けていると思われるが、彼の『文学評論』（一九〇九）の第六編ではデフォーについて次のように述べられている。

もし文章の一極端に詩と名づけるものがあって、反對の極端に散文というものが控えているならば、もし詩が道楽で散文が用事とすれば、もし詩が面白い座談で散文がさつと片付けべき懸合事とすれば、デフォーは決して詩に触れない男である。触れ得べき性質を有していなかったのみならず、触れることを屑しとしなかつた男である。

このように高飛車な断定を下した後、まず、『ロビンソン・クルーソー』（Robinson Crusoe, 1719）については次の

ように言っている。

クルーソーの事件は自家保存の大本能から出るのだから必要な生活の活動である。けれども此必然なる性格の活動を引き起こす、偶然の事件は死したる自然である。……クルーソーは単に自然と相撲を取っている。そうして着々進行する。然し石地蔵と相撲を取って番組も段々進みましたと云う様なものである。……加速度の興味が無い。

また『モル・フランダーズ』（Moll Flanders, 1722）については次のように述べている。

何処まで行っても盗^とって許^{ばか}りいる。盗む品物と場所とは少し違うかも知れないが、方法^{かた}杯は大抵似たものである。極端に云えば同じ膳に向って同じ箸で三度の飯を繰り返していると同様である。但し何遍繰り返しても人生の事実だから、事実通り度数迄も嘘でない様にかくんだと云えば夫迄である。然し此智識を得て喜ぶものは警察の役人ばかりだろう。

*

デフォーの主人公は電鉄の軌道の如く一定不変の単調な態度を以て世相に対してしていると云わなければなら

ない。デフォーは吾人をして如何なる事が起ったかを知らしめる手際を持っている。然し是以外の態度はどうしても取る事の出来ない男である。吾人をして如何なる事が起ったのかを見せしめたり、又これを感じしめたりする様には決して出来ない。

(但し、漱石は「私は正直に白状するがデフォーの全集を読み通していない。以上の講義は私の知る限りに就て、私の考えを纏めたものである。だからデフォーに対しては甚だ済まん気がする」と率直に認めている。)

ステイヴン、漱石以外にも、デフォーの物語を無味乾燥な事実の羅列と見る論は絶たず、初期のイギリス小説を論じた力作『小説の興隆』(The Rise of the Novel, 1957)の著者イーアン・ウォット(Ian Watt)なども根本的には同意見である。確かにデフォーには、作品によっては、あるいは部分的には、そのような誇りを免れないものもあるが、しかし、少なくとも『ロビンソン・クルーソー』、『モル・フランダーズ』及び『ロクサーナ』(Roxana, 1724)に関しては、前掲の評語におけるように簡単には片付けられぬ(時に現代小説の諸特徴にも通じるような)、多くの問題と興味が含まれていると私は思うし、また、それが最近のデフ

ォー論の一般的論調でもある。以下、私なりに『モル・フランダーズ』の単純そうでありながら、看過することのできぬ工夫や風趣について考察してみたい。

一 エピソードの相关性

『モル・フランダーズ』は、個々の事件をその生起するままに、何の整理も加えず羅列的に語っているような体裁を取っているが、実際には、前後で語られる事件の間に密接な照応の見られる場合が多く、有機的関連が存在する。

まず、モル自身と、モルの母親の経歴との間には符合する点が多く、母親はモルのダブルであり、モルの淪落の人生へのルールを敷いた観がある。モルの母親は窃盗と淫売を業として遂にニューゲート監獄に送られ、絞首刑になるところを、妊娠中だということで延期され、モルを生んだ後、罪を軽減されてヴァージニアへ流刑になったのであるが、モルのたどる道もこれに符節が合っている。モルは多くの拘捕や窃盗を重ねた後、銀食器店で窃盗の現行犯として逮捕されてニューゲートへ送られるのだが、その時のこととは次のように語られている。

それで私はニューゲートに送られました。あのおそろしい所！ その名前を聞いただけで全身の血が凍る思いがします。そこは私の数多くの仲間が押し込められ、運命の絞首台へと出て行ったところです。そこは私の母が大きな苦しみをなめた所であり、私の生れた場所でもありますが、私にとってこの場所から二度と救われる見込はなく、いまわしい死が待っているだけでした。要するに、そこは私を長いこと待ち受けていた所であり、これまで私が長い間うまうまと逃れていた所なのです。(二七三頁。頁数はOxford English Novels版による。以下の引用文についても同じ。)

モルとこの母親との因縁は、単に母と娘という関係、また犯罪歴の共通という点のみに留まらず、この母親が、モルの結婚した男性の母親でもあるという事情によって一層複雑なものになる。モルは、父親ちがいの弟と結婚し、二人の間には子供まで生し、血族相姦の罪を犯したことになるわけで、これを知った彼女の懊悩は極度に達するが、それだけに彼女と母親との絆は、おぞましいものながら、世の常のものよりは一層深いものになる。

もう一人モルが、「お母さん」(“Mother”)と呼ぶ女性が

彼女の後半生に現れるが、後に見るように、彼女はモルの秘密の出産の世話を初め、モルの種々の危難に際して非常な助力を与えてくれる。この「お母さん」も、かつては淫行と犯罪の世界に生きていた女であり、モルの実母がそうであった以上に、悪の道に通曉した先達である。マクシミリアン・ノヴァクによれば、“mother”という語は「売春宿の女将」を呼ぶのに用いられたということであるが、この女性⁽²⁾はモルにとって、このニュアンスを持った「お母さん」でもある。

エピソードが前後で関連を持つ例をもう一つ挙げると、ランカシャーで、大変な金持だと思ひ込んでモルが結婚した相手ジェミー(Jemmy)が、実は無一文で、彼こそモルの財産を目当てに結婚したのであることが分かって、二人は結局結婚を解消せざるを得ず、後にはこの男が追剥の頭目であったことが分かるのだが、その後貧に追われて悪業を重ねたモルが捉えられてニューゲートに送られたとき、この男も追剥としてニューゲートに送られて来る。二人は同じ船でヴァージニアへ流刑になることになり、その頃のモルは悪業の成果によって金持になっていたので、流刑地で土地を買って農園を経営し、幸せな夫婦として暮すこと

になる。この辺の筋の運びには、ややファンタスティクな嫌いがあるにしても、ランカシャーで結婚したときの二人が互いに強く愛しつゝも遂に別れなければならなくなり、後に思いが叶って結ばれる経緯は、初めから作者の計画に入っていたものと思われる。

二 言葉の陰翳

この小説では、一つの言葉が兩義に用いられている場合が幾つかあり、それが作品に深みを添えている。“mother”については既に見たが、この物語の冒頭の部分では、幼いモルが、「奉公に行くのはいやだ、あたいは奥方 (gentle-woman) になりたいんだ」と言つて保母に笑われるところがある。

大人たちは奥方という言葉や或る一つの意味にとつていたのに、私はそれと別な意味に使つていたのです。つまり、あわれなことに！ 私の奥方になるといふのは、ひとりで働けて、あのこわい奉公に行かずとも暮して行くのに十分なお金がとれるというだけのことでした。ところが大人がいうのは、りっぱで、豊かで身

分の高い、私の知らないような暮しをする意味なのでした。(二三頁)

更にモルが「奥方」の例として、生活費を得るのにレースの繕いをしたり、レースの婦人帽を洗濯したりしている女の名を挙げて、「あのひとは奥方よ、みんながおくさんと呼んでるわ」と言ふと、保母は、「かわいそうに、そんな奥方ならすぐになれますよ。あのひとは身持ちが悪くて、てなし子が二、三人あるのです」と答える。

ここで、モルが幼稚さから「奥方」と呼び、保母からその実態を指摘されたような存在に、成人した後のモル自身がなるのであつて、ここにはアイロニーが、また、予示 (foreshadowing) の手法が見られる。

gentleman という語の用い方についても、屈折が見られる。ランカシャーで結婚した夫ジェミーと別れることになったとき、モルは彼について次のように述べている。

彼は女をだますのを商売にしている極道者ではなく、……運が悪くおちぶれてはいますが、もともと紳士で、かつてはりっぱな暮しをしていた人です。……彼は気持が大きく、分別があり、しかも人一倍陽気で、ほんとに愛すべき人だったので……。(二五一頁)

ここでの「紳士」という語は人間の中味を問題にしている。さて、後にヴァージニアの農園にジェミーと共に落ち着いたモルは、夫の服装について、次のような気配りをする。

私は夫が欲しがっているようなものは何一つ残らず買入れるよう気を配りました。例えば上等な長い毛のかつら二つ、銀の柄のついた剣二ふり、鳥撃銃三、四丁、革袋とりっぱなピストルがついている鞍、それに緋色のマントなど、要するに、彼が有難がるもので、彼をりっぱな紳士……に仕立て上げるようなものは残らず取り寄せたのです。(二四〇頁)

ここに挙げられている品物のうち、農園で実際に役立ちそうなものは猟銃くらいである。モルは夫に、何はともあれ、紳士の格好をさせたいのである。社交界のない農園で、ここに羅列されているような服装を身につけたところで、仮装行列の一人が迷い込んで来たような驚きを与えるだけであろう。しかし、この幼稚な「紳士」への憧れにかつての「奥方」の場合と同じように、モルの稚く切ない願いが込められているのだと考えることができよう。

「母親」のこの小説中で果たす異常な役割を前に見たが、

この語は他にも両義に用いられている場合がある。モルが自分の生む子供を里子に出すことを産婆に勧められ、その子がひどい扱いを受けるのではないかと恐れてためらっていると、産婆は「あんたも他の良心のある母親たち (conscientious mothers) が今までにやったと同じように」(一七六頁) するようにと言う。この言葉に関してモルは次のように語っている。

私には彼女が良心のある母親たちという言葉で何を言おうとしていたのかわかりました。彼女の気持では良心のある淫売たち (conscientious whores) と言うつもりだったのでしょうが、私をおこらせたくなかったのです。(一七六頁)

ここでモルは元来子供を育てる者を意味するはずの「母親」という言葉が「生殖行為を行うのみで、後は顧みない者」のユーフェミズムとして使われていることに気づいているのである。

なお、その言葉を語っている者自身は意識していなくても、モルの将来を占うような語が用いられる場合がある。例えば、幼いモルは、コルチェスターにいたとき、彼女を訪ねて来た貴婦人たちから「ミス」(Miss) と呼ばれるが、

この語は当時、「上流家庭の女の子」という意味以外に、「売春婦」という意味があったので、作者は、前に見た“gentlewoman”の場合と同様、この言葉によってモルの今後の生活がたどるようになる道を暗示しているのであるとマクシミリアン・ノヴァクはいう。⁽³⁾

また、コルチエスターの私塾で受けた教育についてモルは「私たちは食物が簡素で住居が粗末、着物がみすぼらしいという点を除いたら、まるで舞踊学校(dancing school)にでも行っているのと同じように、行儀作法にかなった上品な様を受けたのです」(一〇頁)と語っているが、この「舞踊学校」という語も、本質を離れた形式的な作法を教える所の意味を暗示しているのだと、ノヴァクはドクター・ジョンソンが「チエスターフィールド書簡集」を批評した際に用いた用法を引用して指摘している。⁽⁴⁾(そう言えば後に、チャールズ・ディケンズの『荒涼館』(Bleak House, 1852-53)において、礼儀作法の典型として登場する利己的で誠意のないダンス教師ターヴィドロップ(Turveydrop)を我々は思い出す。)

右に見たような、陰翳に富んだ言葉の用法は、人生の複雑さ、割り切ることの難しい重層性を示しているものと言えよう。

この関連において、パラドックスまたは撞着語法(moron)とも呼べるような語法がしばしば用いられているのにも注目される。

モルは最初の夫に死別した後、織物商と結婚するが、この夫は野放図な浪費の果て、破産して債務者拘留所に入れられ、後にフランスへ高飛びしてしまう。その後二人は会うことはないが、モルの法律上の婚姻関係は存在しているわけである。彼女は次のように言っている。

私の立場はすごいふん妙なものでした。子供はありませんでした……私は、魔力にかけられた未亡人なのです。夫があつて、ないのです。夫はたとえ今後五十年生きて二度とイギリスに帰ることはないと知りながらも、私は再婚の資格があるとは言えないのです。このようなわけで、私はどんな申し出を受けようと結婚は許されない身なのです。(六四頁)

(傍点筆者、以下同じ。)

更に、その後モルの前に現れる男性にも、結婚の資格の曖昧なものが何人かある。例えばモルがバースで親しくなり、同棲することになる金持の男には妻がいるのだが、彼女は脳病にかかっていて、親戚にあずけられている。モル

はこのことに関連して次のように言っている。

彼には妻がない、つまり、妻といわれる人が、妻の役を果していない、それは確かなことで、その点心配はありませんでしたが、良心の反省から男、とりわけ理非をわきまえた男が、情婦の腕から脱け出すことはよくあることで、彼も遂にはそうなるのです。(一二〇頁)

そして、モルは、この男と過した六年間について仕合せで不仕合せな状態」(happy and unhappy condition) (一二〇頁)と語っている。

また、モルが財産の管理のことで相談を持ちかけ、やがていい仲になる銀行家は次のように言う。「わたしには妻があつて、ないので……あれは妻であつて妻でないんです」(一三四―一五頁) 彼の妻は彼を裏切つて最初陸軍将校の許にはしり、その男の子を生み、次には呉服屋の店員と駆け落ちしてしまつたのである。

このように、モル自身の身分が曖昧なのに加えて、その相手になる男性も夫婦関係において複雑な状況に生きていることが、この小説で語られる男女の交渉をひととき陰翳に富んだものにしてゐる。

更に、同様の語法として、モルは、バースに住んで大した財産もないのに金持らしい体面を保とうとしている自分を、「財産はないのに、いわば、財産家の女性」(一〇六頁)と呼んでいる。

三 モルの二面性

パラドックスと言へば、モルが悪女でありながら悪女でなく、憎むべき女でありながら、また、愛すべき、憐れむべき存在として描かれていることは最高のパラドックスであらう。

この効果を挙げるためにデフォーは多くの工夫をしているが、その第一は、モルが悪事をなすのに、自分の方から積極的に働きかけるのでなしに、純情なため、また、後には、状況の都合さに誘われて、つい、人倫にもとる行為をするように書いてある場合が多いのはその例であらう。

モルの老保母がモルの十四歳ぐらいの時に死亡した後、彼女はある金持の家庭に引き取られるが、その二人兄弟の兄の方が、彼女の美貌に目をつけ、金と甘言で彼女を誘惑しようとする。この攻勢に対してモルはまったく無防備で

ある。

若主人は何を求めているのだろうかと時に思いめぐらしたことはあるにはありますが、考えることは嬉しい言葉や金貨のことばかりで、彼が私と結婚しようがしまいが、それはあまりたいしたことではないような気がしました。また、……自分の身のために交換条件を持ち出す必要があることなど思ひもつきませんでした。

(二五頁)

こうして、モルはあつげなく貞操を奪われるのであるが、この場合、彼女は全く受け身であり、自分の方から詐術を弄したということはない。この点、後に出版されるリチャードソンの『パミラ』(Pamela, 1740-41)の女主人公のカマトトぶりや、更にそれを極端にしたフィールディングの作と言われる『シャミラ』(Shamela, 1741)の女主人公のあばずれ振りなどとは対照的であつて、モルは読者の憫笑を買ふことはあつても、憎しみを招くことはないであらう。

モルが、後に結婚する織物商との関連についても同様の描き方が見られる。彼は浪費の末、破産に追い込まれたとき、債務者拘留所に彼女を呼んで、差押えが行われないうちに、家にあるものを残らず安全な所へ運ぶように、その

中から彼女の好きなものを何でも持って行くようにという。彼女はこの命令に従い品物を確保するが、たとえ夫に言われなくても、彼女自身の才覚で同じことをしたかもしれない。ただ、夫の命令に従つたのだということによつて、彼女の罪は軽減される感じがするのである。

モルの後半生に彼女の身辺に現れる産婆は更に彼女の悪業の印象を軽減するのに役立っている。前に見たように、彼女はモルが正式の結婚によらぬ子を内密に出産する時も助けになってくれ、生まれた子を里子に出すことも引き受けてくれる。このとき、モルは次のように言っている。

でも子供とまるつきり別れてしまうことを考えると私の胸はひどく痛むのでした。それに、よくは知らないけれども、子供が殺されたり、放っておかれ、扱いが悪くて飢え死させられたりする(どちらにしても同じこと)、そんなことがあるのじゃないかと思うと、恐しさを覚えずにはいられませんでした。(一七三頁)

モルはこのように、いっぱい母親らしい危惧を述べることに、より、読者の同情を引くわけだが、産婆は、そんな心配は絶対ないと保証して、里親を探す仕事に當ってくれり。その後、彼女は、泥酔した紳士からモルが奪った品物

を種に、この紳士をゆすりに行く役も演じ、その他モルの犯罪のほとんどすべての場合に、この産婆がイニシヤティヴを取るものであって、まことにモルの達者な「分身」(alter ego)と呼ぶべき存在である。もしモルが一人で事に当たっていたら、彼女が読者に与える印象は、ずっと苛酷な、陰惨なものになっていたであらう。

モルが悪業における自分の自発性を否定して他者の教唆のせいにする最も著しい例は悪魔(Devil)の誘惑に帰する場合である。これは随所に見られるが、例えばモルが生まれて初めて置き引きを行ったときは次のように語られている。

出かけるときには、頭に何のたくらみもなかったことは確かです。私はどこへ行くのか、何の用事があるのか、知りもせず考えもしませんでした。しかし悪魔が私を連れ出し、えさを用意すると共にその場所へ私を連れていったに違いありません。何故なら私は自分がどこへ行くのかも何をしているのかも分からなかったのですから。(一九一頁)

モルが悪の生活から足を洗おうと思ひ立つ折もあるが、悪魔はそれを許そうとしない。

大そう骨を折って私をこの道に引きこんだ働きものの悪魔は、私をしっかりとつかまえていて元へ戻ることを許しません。で、貧困が私をこの道へ引き入れたように、今度は貪欲が私をこの道に引き留め、とうとう元へ戻ることができなくなってしまうのです。(二〇三頁)

但し、このように頻繁に悪魔を引き合いに出すことが、作者が意図したであろうように、果たしてモルに対する読者の好意を増す効果があるかどうかは疑問であらう。また、効果は時代思潮や読者の個人差によっても相違があるであらう。

また、モルは悪業を犯した後、自己弁護、自己正当化に類する言辭を吐くことが多い。学校帰りの小さな女の子の美しいネックレスを奪ったときには次のように言っている。

子供には何の危害も加えなかったのですし、私はただいたいけな子供を独りで家に帰すようなことをした両親の怠慢に対し当然なとがめ立てをしたのであって、これにこりて両親は、この次からもっと注意するだらう、とそう考えただけでした。(一九四頁)

こうしてモルは、自分の行為が子供の両親に対するよい教訓になったと言いたいのである。また、このネックレースを奪ったときの情況として、次のように述べられている。

この時、実は、悪魔が暗い路地で子供を泣かないように殺してしまえとそそのかしたのですが、それを考えただけで私はあまりの恐しさにくらくらつと倒れそうになりました。(一九四頁)

モルはこうして、殺人という大きな罪を犯さなかったということによって、もっと小さな方の罪は帳消しにしようとしている。

バーソロミューの祭りの晩に、モルは、泥酔した紳士に誘われるままに一緒に馬車に乗り、ホテルへ行き、彼の願いを叶えてやり、帰途、紳士の時計、財布、短剣等をこっそり盗って馬車を飛び下りて逃げる。その後で彼女は言うている。

酒に酔い、同時に心に悪い考えがむらむらとわいて熱くなっている男ほど愚かで、いやらしく、こっけいなものはありません。その男は一度に二つの悪魔に取りつかれているわけで、もはや理性によっておのれを抑えられないことは水車が水がなくては粉をひくことが

できないのと同じこと……分別そのものが熱に浮かされて盲目になり、自分が考えてもばからしいような愚行に走るのです。(二二六頁)

モルは、このような酔漢を懲らしめて今後を戒めるという功德を施したのだということを自分にもひとにも納得させたいのである。モルの味方である産婆は、彼女の報告を聞いて次のように褒めてくれる。

「まったくですよ、あんた、……そういう目に会わしてやるのがおそらくどんなお説教よりもその男を改心させるのに効き目があるでしょうよ」(二二八頁)

四 精神生活

前に見たように、モルはコルチエスターの家の兄息子に対しては、純粹な愛を感じていた。その兄息子がモルをさんざん弄んだ後、事情を知らぬ弟の方がモルに求婚したのを奇貨として、彼女に弟と結婚するよう勧め、自分は重荷になってきたモルとの関係を絶とうとしたとき、彼女は大きな絶望を感じる。

全く私は気も狂わんばかりに彼を愛していたのです。

いつの日か彼を夫にすることができるといふ夢を常に
いだいてきたのにその夢のよりどころとなる一切の期
待が失われることになるのです。こうしたことが私の
心に重くのしかかり、とうとう重い病の床に倒れてし
まいました。苦悩のあまり、要するに、私はひどい熱
病にかかったのです。しかも、熱病は長く続きました
ので家の人たちはみな助かるまいと思ったほどでし
た。(四二頁)

こうして、モルは五週間近く病床に就くことになる。

ようやく回復したモルは、弟息子の求婚を受け入れなけ
ればこの家を出なければならず、路頭に迷うことになるこ
とを思つて、心ならずも彼と結婚する。しかし、その後
も彼女は兄息子に対する恋情を断ち切ることができず、夫で
ある弟息子に抱かれていても兄息子のことを思っている。

私は妻として当然なほどにも、また夫のいつくしみに
応えるほどにも、夫を愛したとは申せません。……夫
と床を共にする度に、兄の腕に抱かれることを願うの
でした。要するに、私は毎日おのれの欲望の中で、姦
通と近親相姦の罪を犯していたわけで、それはまさし
く事実そうしたも同然の罪でありました。(五九頁)

この兄息子から受けた裏切り、また、彼女としては、弟息
子に対して行つたと言えなくはない裏切りを経験すること
により、モルはこれまでの彼女とは違った存在になってゆ
く。すなわち、彼女は自然の感情の発露ということには無
縁になっていくのである。モルは最初から兄弟二人のう
ち、どちらでもよいから掴まえてやろうと積極的に働きか
けたのだという説をなす論者もあるが、これはモルの後々
の行動に基づいてひるがえって類推した謬見である。

彼女は最初の結婚によつて二人の子供を生むが、夫は結
婚生活五年にして病死してしまふ。その時のことを彼女は
次のように語っている。

私は千二百ポンドばかりの財産を持った未亡人となつ
たわけです。

二人の子供は、幸い夫の両親が引き取ってくれまし
た。(五八―五九頁)

この語りぶりで知られるように、夫を失つた時のモルにと
つては手許に残つた財産の額が第一の問題であり、子供た
ちを夫の親に渡すことは、悲しいよりも、むしろ幸いなこ
となのである。生きることには必死な彼女には、母親らしい
感情は消え失せてしまつた。

結婚というものに対する見方も変わってきていることは、ヴァージニアで夫として一緒に暮らしていた弟が、二人の不自然な関係に悩んで肺病になったときの彼女の言葉からも知られる。

彼の体は目に見えて衰えていきましたので、この国に留まるつもりなら、私はここで十分自分に有利な再婚をすることもできるのではないかと思われました。

(二〇四頁)

モルは夫が生きているのに、既に再婚のことを考えているのである。

子供の話に戻ると、モルは何人もの男によって十人近くの子供を生むが、それらの子供の何れについても簡単にしか触れず、ほとんど自分で育てることはしない。彼女は、結婚していないある男性の子供を宿したとき、次のように言っている。

私はほとほと困り果て、ひどく憂鬱になりました。……金は持っていました、友人はなく、それに子供ができて自分の手でその面倒をみなければならぬ様子なのです。こんなことは、これまでの私の物語から分かるように、この身に未だ経験したこともないやっ

い事でした。(二六一頁)

このように子供の養育を「やっかい事」と考え、子供には冷淡と見えるモルが、子供に対する熱烈な愛情を示す場合が一つだけある。それは、彼女がヴァージニアで夫（父親の弟）との間に生まれた息子を残して一人イギリスに渡った後、二十年たって再びヴァージニアへ戻り、成人した息子のいる農園をこっそり見に行く時である。

母親でありながらこうして現に自分の息子、顔立ちの美しい、りっぱな様子をした青年紳士を目の前にし、相手に自分のことを知らせることもならず、相手の注意をひくこともできないでいるのはほんとうにつらいことでした。これを読む世の母親に考えていただきたい、私がどんなに苦しい思いをしながらおのれを抑えたか、わが子を抱いて泣きたいと心の中でどんなに切ない思いをしたか、またどんなにはらわたをかきむしられるような気がしたか、思ってもみて下さい、……息子が通り過ぎて行ったあと私はまなこをこらし体を震わせながら立ちつくし、その姿が見えなくなるまでじっと見送っていました。それから、草地の上の目じるしをつけておいた場所に坐り……そしてうつ伏せに

なつて涙を流し、息子が先程立っていた地面に接吻しました。(三三二頁)

他の子供たちには冷淡だったモルが、この男の子にだけ濃厚な愛情を示すのはおかしいという説をなす評者もある。しかし、ヴァージニアを去ってイギリスで過した二十年間にモルは、初めは生活を安定させてくれる男性を求めて、次に、年とつて女性としての魅力を失った後は掏摸、泥棒として多くの辛酸を嘗めて、今やようやく裕福とも呼ぶべき境涯に達した身であり、その間に、母の愛を拒まれつつも「りっぱな青年紳士」に成人した息子を見る感慨は尋常のものではなかったのだということも考えられる。そしてそこには、かつてモルの母親が、生別したモルが息子の妻として現れた際に感じた極限的感情も投影されているように思われる。二代にわたる辛薄き母子関係が語られているのであつて、モルとしては珍しい感情の表出には謂れがあると言えよう。

さて、モルが息子が立っていた地面にひれ伏してキスしたとき、彼女を案内して来た女から、「地面は湿気があつて体に悪いから起きるように」(三三二頁)と注意され、直ちにこの忠告に従つて立ち上がるのは、いかにもデフォー

らしい書き方だと言わねばなるまい。彼の描く人物は、絶対に感情に動かされないというのは誤りであつて、ただ、それに長く身を任せることは稀なのである。

ウルチェスターでの苦い経験からモルが学んだ教訓の一つは、進路を一つに限定せず、常に別の道を用意して置くことであつた。例えば彼女は運試しに北国へ行く前に財産の保管を頼んだ銀行員から好意を示されるが、決定的な返事は与えずに旅立ち、ランカシャーでジミーと結婚する。しかし、この間も銀行員との連絡は絶っていない。そしてジミーとの結婚が破れた後は、この銀行員と結婚することになる。かつての單純なモルが、このように達者な世渡りをするようになっていたのである。

世間を知つたモルは、愛情よりも生活を、そして、生活の必需品たる金銭を第一に考える女に変わつてゐる。よく指摘されるように、モルは生活の舞台が変わることに、それまでの自分が獲得した富の額を丹念に述べることを忘れない。その富は、初めは結婚、同棲等により、後には犯罪によつて手に入れたものであるが、モルはこの富獲得の手段の性質について時に反省し、悔悟の言葉を述べることはあるが、それだからと言ってこの富を捨てようとか、今ま

での生活形態を改めようとかするところまでは行かない。彼女は一貫した精神生活を失ってしまったのだと言えよう。その結果は、富の獲得の手段たる窃盗においてさえ、時に矛盾したとんまな行為をするようになる。

例えば、居酒屋の戸口で、給仕人から、客の馬を一時押えていてくれと頼まれるが、そのまま馬を曳いて女將のところへ戻って来る。

馬の扱い方を知る者にとってはこれは獲物であつたでしょうが、泥棒が盗んだものの処分にこれほど困つたことはありませんまい。私が家に帰りますと、女將はすっかり面喰つてしまい、二人ともこの動物をどう処分したらいいか分かりませんでした。(二五四頁)

結局、元の居酒屋へ馬を戻すことになり、とんだ骨折り損をするが、この頃のモルは、泥棒する機会さえ与えられれば、前後の見境なく盗まずにはいられない習性が身につけているものと思われる。モルはアイデンティティを喪失してしまつたのである。

モルは自分を正視することが時にないわけではない。彼女は妻に裏切られた銀行員から求婚され、それを承諾したとき、次のように言っている。

わたしは何といういまわしい女だろう！ どうしてまたこの罪のない紳士がわたしにだまされようとしているのだろう！ 売女を離婚して別の売女の腕に身を投げかけようとしているのをどうしてさとらないのだろう！ 彼が結婚しようとしている相手は兄弟二人と共寝し、血を分けた弟との間に三人も子供を生んだ女なのだ！ ニューゲートの監獄で生れ、母親は淫売で、今は植民地送りされている泥棒なのだ！ 十二人の男と共寝し、あのひとと会ってからも子供を一人生んでいる女なのだ！ かわいそうなひと！ あのひととはどうしようというのだろう！ (一八二頁)

しかし、モルはこのような自己嫌惡の言葉は吐いても、結局この銀行員と結婚するのであって、自分の過去に捉われて有利な道に踏み出すのを思い留まるということはない。モルがたまたま口にする自分の罪を憎み、悔いる言葉は、読者の道徳心に対するリップ・サービスとしての効用は果たしているが、モルの全霊を根底から揺るがすようなものではない。その証拠には、泥棒時代の彼女は「私はずりのわざに上達し、そのわざのうまさでは未だ私の右に出るものは殆どなく、また私ほど不運な目に会わず長くやつて

いたものも殆どないくらいで……」(二三頁)と言い、掏った金時計が二十一個手元にあったこともあると自慢する(二〇三頁)ことさえあるし、また、流刑囚としてヴァージニアに送られた後、成人した自分の息子に会ったとき彼女は贈り物をするが、それはかつての彼女の盗品の時計の一つである。

私は彼に一つの贈り物をしました。……私はこれ以外にあげるような値打ちのあるものは何も持っていないので、時折私と思ってこれに接吻してほしい、といいました。もちろん、それは、ロンドンの教会堂で或る貴婦人の脇の下から盗ったものなどとは話しませんでした。(三三七—三八頁)

モルは、話さなければ、あるいは知らなければ、物事に付着している汚濁の歴史は問題にならないのだと考えている節がある。この感じ方は次の例にも見られる。

モルは母親から、自分の夫が実は自分と血を分けた弟なのだと言われたとき、次のように言っている。

ああ！ あの話さえ聞かなかったら、何もかもよかったのに、何も知らなければ、夫と寝ることも何ら罪でなかっただろうに、自分の身内だとは何も知らなかつ

たのですから。(三八頁)

彼女は根本的に「見ぬもの清し」「知らぬが仏」の哲学に従っているのだ。モルには精神生活がないとは言えないが、徹底していず、御都合主義であるという謗りを免れないであろう。

モルはまた、「貧しさを与えて下さいますな。盗み心が起きませんように」とも言っている。苦難の果て、モルの達したモラルは甚だ便宜的であり、深みを欠いたものであったと言えよう。しかしその反面、汚辱にまみれ、満身創痍のはずの彼女が、なおも颯爽として生命力を維持し続けることに、当時の読者の多くは快哉を叫んだのであろう。

以上、幾つかの角度からこの作品を見てきたが、表現上の工夫も豊かであり、継起する事件の間に、ある程度の相関関係も設定されており、また、深淺の差は暫く措くとしても、精神の内面に照明を当てる試みもなされている。これらの点を考慮に入れるとき、『モル・フランダーズ』を単純なピカレスクと見なすのは適當でなく、多くの發展性を秘めた近代小説の先驅として認めるべきであろう。

註

- (1) 塚本利明『文学評論』に「つて」(『講談夏目漱石』第二卷所収)参照。
- (2) Maximillian E. Novak: *Realism, Myth, and History in Defoe's Fiction*, p. 83. 444 Epic Partridge: *A Dictionary of Slang and Unconventional English* 270 "mother" の母と "female bawd" 271 の頭を替へてつる。
- (3) Maximillian E. Novak: *Economics and the Fiction of Daniel Defoe*, p. 88.
- (4) 同右 p. 84.
- (5) 例へば Robert Alan Donovan: "The Two Heroines of *Moll Flanders*" in *The Shaping Vision*.

(訳文は岩波文庫版の伊沢龍雄氏のものに依らしていただいた)